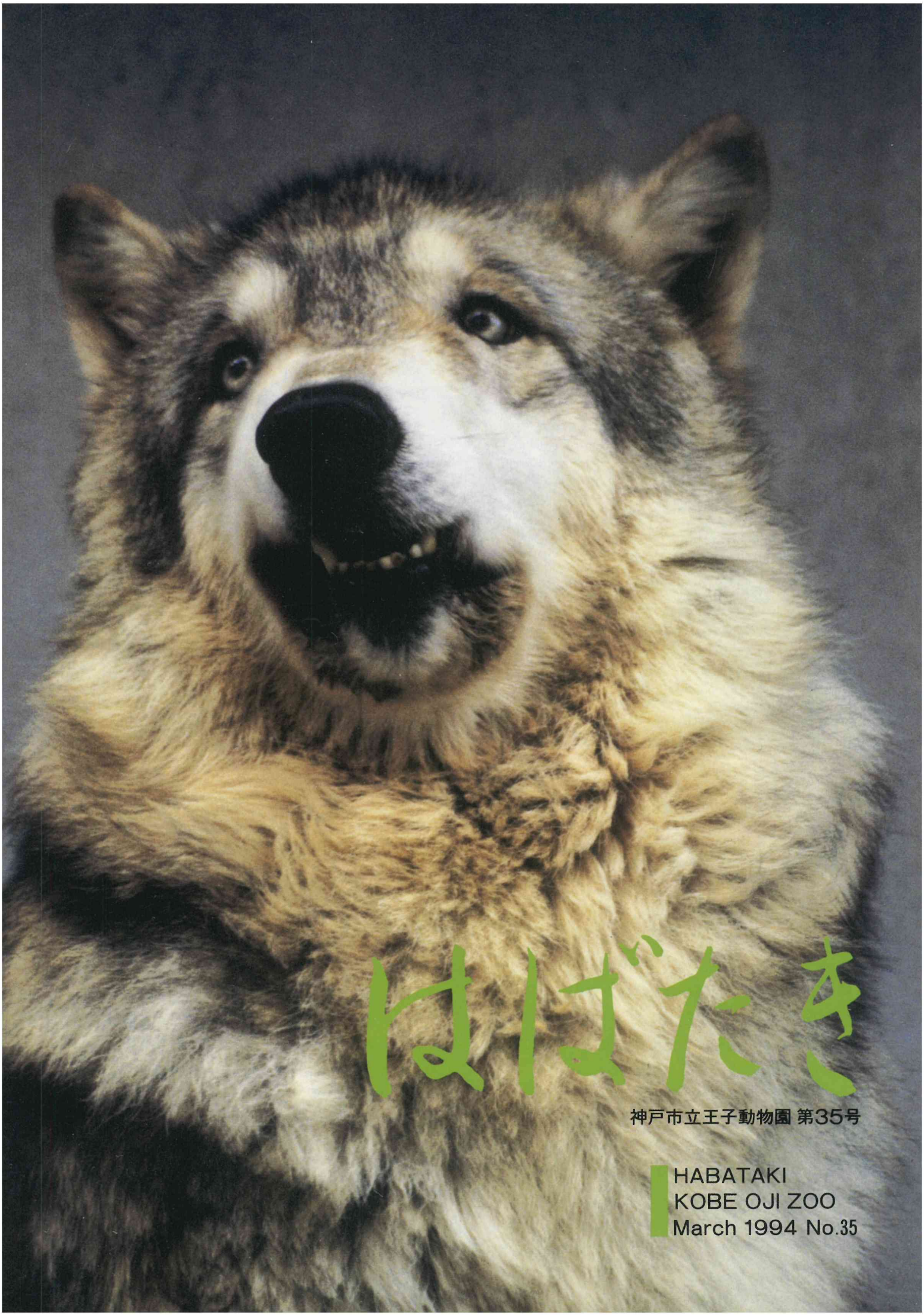


はばたき

神戸市立王子動物園 第35号

HABATAKI
KOBE OJI ZOO
March 1994 No.35

創刊20周年を祝って

神戸市長　笹山幸俊

神戸市立王子動物園発行の『はばたき』が、創刊20周年を迎えました。これを機に全ページカラー写真とし、内容をさらに充実させて楽しい雑誌にすることにしました。

さて王子動物園では、これまで施設整備に努める一方、金絲猴など希少動物の飼育や繁殖を手がけてきました。おかげをもちまして年間130 万人もの方々に来園いただいております。しかし開園以来42年が過ぎ、老朽化も目立ってきましたので、平成元年度から再編整備に着手し、これまでに「動物とこどもの国」「新アシカ池」等をつくり、今年の夏には水中生態の見られる「ホッキョクグマ舎」を完成させる予定です。

これからも次代を担う子供たちのための社会教育施設として、また街の真ん中にある市民の憩いの場として、王子動物園を、動物がいきいきと暮らしていけるよう環境を整え、夢のある動物園にしていきたいと考えております。

そして、快適で暮らしやすい街『アーバンリゾート都市・神戸』において、市民の皆様にいつまでも愛され、親しまれる動物園として、その役割を果たしてくれることを期待しています。

早春賦
（大フライングゲージに集うショウジョウトキ）

はばたき

No.35 March 1994

今号の特集 イヌ・オオカミ

イヌは、オオカミが家畜化されたものという説が有力ですが、その歴史は古く、およそ12000年前のことと考えられています。世界各地にいる純粋犬の遺伝子を調べれば、イヌを連れて旅をした古人類の移動パターンも推測できるようです。コンパニオンアニマル（伴侶動物）とも呼ばれて親しまれ、長く私たち人間とつき合ってきた愛すべき仲間たちのことをよりよく理解するために、今回の特集を組みました。

目次

❸〜❹ ダチョウのヒナ誕生（トピックス①）
文：中筋功二
写真：石川康司、中筋功二
ダチョウの卵をエミューがかえした！動物園界でも珍しい話題を、ヒナの成長も含めてお伝えします。

❺〜❻ イヌの特集Ⅰ
文：安田伸二
写真：谷岡正之
イヌ科の特徴って、何だろう？食べものは肉ばかりじゃないんだぞ。食性や歯について学んでみましょう。

❼〜❽ アカコンゴウインコの誕生（トピックス②）
文・写真：川上博司
王子動物園では初めてのアカコンゴウインコの繁殖。成功に至るまでには、餌を変え、巣箱や止まり木を改善するなど陰の努力がありました。

❾ イヌの特集Ⅱ（都会化するタヌキ）
文・写真：村田浩一
シティー・ボーイならぬ、シティー・ラクーンドッグ（タヌキの英語名です）。タヌキが都会で増える原因と問題点をさぐります。

❿ イヌに関する本の紹介（図書室から）
文：安宅範子
写真：谷岡正之
イヌのことを知るには読書も大切です。動物園の図書室おすすめの本はこれです。

オオカミとイヌのおもしろ話
文：浜　夏樹
イラスト：川上博司
オオカミの遠吠えは有名です。でも、なぜ鳴くのか知っていますか？

４コマまんが
漫画：川上博司
マンガに説明はいりませんよネ。

⓫ 資料館特別展
文：宍戸正芳
写真：谷岡正之
昨年の11月６日より、動物科学資料館内で開催されている特別展の報告。日本の野生動物の現状と保護について解説します。

⓬ キンシコウの成長
文：松尾嘉則
写真：権藤眞禎、岸田一也
キンシコウの愛愛ちゃんは、生粋の神戸っ子。生まれてから10ヵ月たちました。このごろは色々ないたずらも見せてくれます。

⓭〜⓮ 最近のトピックス
イヌ年賀状版画コンクール、サマースクール、オオアリクイ展示、インドゾウの『太郎』急死。

編集後記
文：滝田政男

表紙の解説（撮影メモ）

シンリンオオカミ Western Timber Wolf (*Canis lupus lycaon*)

灘、王子の森に私の両親が仲間入りしたのが1980年。六甲、摩耶の山々を背景にした小獣舎が私たちの住まいです。オオカミは強い動物というイメージがありますが、家族や仲間思いの優しさも合わせもっています。厳しい北国では、獲物を捕えるのに仲間との協力が大切なのです。でも、私は神戸生まれで野生を知りません。人工哺育で育てられ、家庭のペット同様にかわいがられています。

“ブルン、ブルン、ブルン”とヘリコプターが１機、この写真撮影の途中に東の空から飛んできました。聞きなれない音が怖くて、しゃがんでしまいました。そんな臆病な一面をもつ私も、今年で10歳。園内で私を見かけたら「ムサシ！」と気軽に声をかけてくださいネ。

文・写真　岸田一也

飼育トピックス――①

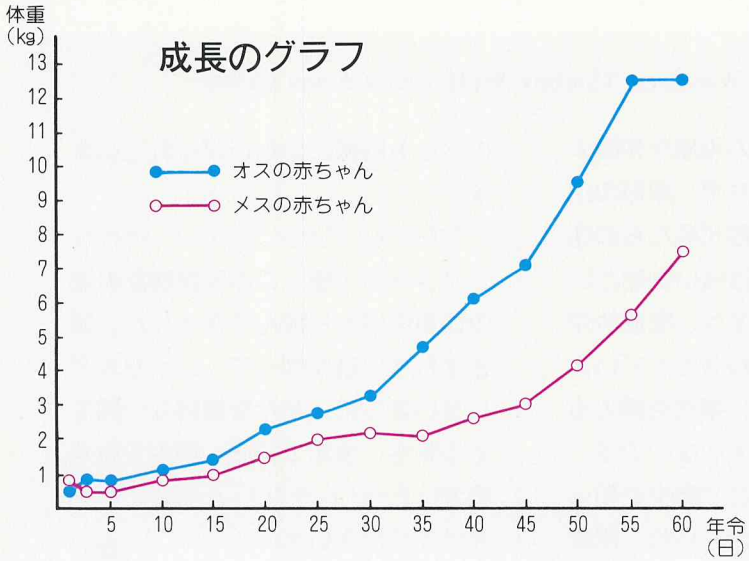
ダチョウのヒナ誕生

●抱卵はエミュー

動物園でのダチョウの繁殖は、人工ふ化で数多く成功していますが、自然ふ化では極めて困難とされています。私たちもふだんから繁殖に努力し、ダチョウに抱卵してもらうように色々と試みてきましたが、現在のところ成功していません。そこで、私たちは発想の転換をし、同じ走鳥類の仲間で比較的産卵時期も近く、また繁殖実績があるエミューに目を向けました。何事も挑戦です。初めに、エミューの卵6個の中にダチョウの卵2個を混ぜて様子を見ることにしました。1993年4月20日のことです。それから3日後、抱卵を確認しました。しかし、立っている時間の方がまだ長いのです。6日後、完全に抱卵しているのを確認しました。仮親による抱卵の成功です。

●ふ化した!

2週間後、抱卵行動が落ち着いたので、さらにダチョウの卵4個を巣に入れて様子を見ることにしました。完全抱卵日から48日後の1993年6月13日午後のことです。親鳥の下から『フョフョ』と鳴き声がしているのに気が付きました。ふ化したの？やったー！そこには大人の両手のひらを合わせたぐらいのヒナが、ちょこんと座っていました。担当スタッフ全員がこの小さな命の誕生を祝福し合いました。さらに続いて、6月21日に2羽目のふ化も確認しました。



●改善したこと

エミューによる抱卵は、雄にしか見られない行動でした。2羽ともふ卵器でふ化させた時より体もしっかりし、脚の水膨れも早くなくなり、餌の食べ方も上手なのです。ダチョウの成育期によく見られる脚弱も認められませんでした。しかし、エミューの親はやはり自分のヒナでないことが分かるのか育雛を行わないため、その日のうちに人工育雛に切り換えました。

私たちは今回の成功をもとに、絶滅の危機に瀕しているダチョウの繁殖に力をそそぎ、創意工夫をしながら、研究を続けてゆきたいと思っています。

ダチョウ卵（実物大）

ニワトリ卵（実物大）

エミュー卵（実物大）

イヌ特集だ!!

オオカミの頭骨

イヌの仲間たちの分類　10属36種

食肉目 Carnivora	イヌ科 Canidae	イヌ属	Canis	家畜のイヌ1種と野生7種
		キツネ属	Vulpes	13種
		アザライヌ属	Dusicyon	8種
		ホッキョクギツネ属	Alopex	1種
		オオミミギツネ属	Otocyon	1種
		リカオン属	Lycaon	1種
		ドール属	Cuon	1種
		タテガミオオカミ属	Chrysocyon	1種
		タヌキ属	Nyctereutes	1種
		ヤブイヌ属	Speothos	1種

イヌの特集Ⅰ

イヌ科動物は、食べ物によって大きく３つにわけられます。

ほとんど純粋な肉食性のもの、その代表がオオカミで、彼らは“パック”という群れをつくり数百㎢という広い行動圏の中で自分たちよりもはるかに大きい草食獣を狩ります。彼らの獲物選びは慎重で健康な個体は手ごわいと知っているため病気やけがをしているものを探し、いったんねらいをつけると執拗に追跡します。鋭い犬歯で獲物にかみつき振り回すことにより獲物の皮膚や血管を切り裂き致命傷を与えます。

肉食もするが植物質のものもかなり食べる雑食性の代表がタヌキです。彼らは、単独で餌をあさり、食べものは季節により大きく変化し、秋には果実などの植物質が餌の大半を占めることがあります。まるで食べもので四季の移り変わりを楽しんでいるようです。

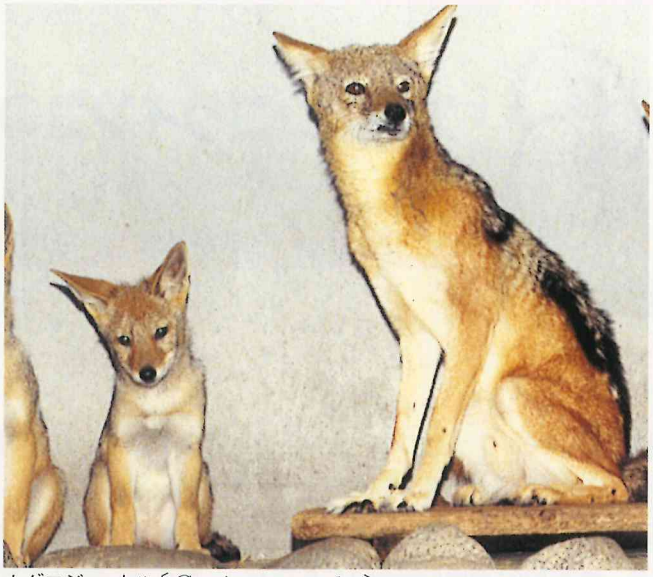
３つめが、シロアリなどの昆虫を主食とする虫食性のものです。その代表がアフリカに生息するオオミミギツネです。その名のとおり大きく長い耳は暑い砂漠や草原で熱を放射するだけでなく地中の甲虫の幼虫が動くかすかな音も聞き分けます。彼らは、小さくて逃げ足の速いシロアリを主食とするため、群れをつくって行動します。また、昆虫を素早くかみつぶすため他のイヌ科の動物より臼歯(奥歯)の数が多く、小さくて弱々しい歯をしています。

- イヌ科動物の歯／犬歯は鋭くとがり臼歯も肉を引き裂くのに適しており上下顎で合計42本

  歯式※　大部分のイヌ科で3/3 1/1 4/4 3/2＝42

  オオミミギツネは、(3/3 1/1 4/4) 4/4＝48

  (　)内は全てのイヌ科で同じ



セグロジャッカル〔*Canis mesomelas*〕

フェネック〔*Vulpes(Fennecus)zerda*〕

※歯式　動物の種類により各種の歯の数が決まっており分類上の重要な基準となり、上門歯/下門歯 上犬歯/下犬歯 上前臼歯/下前臼歯 上後臼歯/下後臼歯の数を左から順次表わしたもの

シマハイエナ〔*Hyaena hyaena*〕
にていますがイヌの仲間ではありません！　(天王寺動物園で撮影)

オオミミギツネ〔*Otocyon megalotis*〕　(天王寺動物園で撮影)

アカコンゴウインコの誕生

1954年から、アカコンゴウインコの飼育を開始した当園で、ついに待望の二世が、昨年(1993年)に生まれました。

アカコンゴウインコは、南米アマゾン水系に生息する大型のインコで、極彩色の羽色(赤中心ですが)と、大きな口ばしが特長です。

夫婦愛は強く、普通一生を共に過ごし、飛ぶ時も採食する時もずっとすぐそばにくっついているくらい、仲が良く愛情こまやかです。

日本のいくつかの動物園でも繁殖は報告され、私ども王子動物園の飼育係もうらやましがっていました。

「なぜ?繁殖しないのだろう?」と、試行錯誤。
「仲も良いのに?」、「巣箱が悪いのかも知れない?」と、巣箱の改修や止り木の移動など四苦八苦。

思案の末、「餌は!?」と、「今までのヒマワリの種子中心では栄養面でバランスが悪かったのでは?」と考えました。

そこで、従来の種子類中心の飼料内容から、バランスの取れた果実などを増やし、外国産インコ用人工飼料も導入して改善を図りました。

するとどうでしょう、今まで繁殖行動が観察されなかったインコや、長年繁殖行動が止まっていたインコ達にも、活発な行動が観察され出しました。

そして、待望のアカコンゴウインコに8月16日、かわいい雛が2羽、巣箱内にちょこんと……。

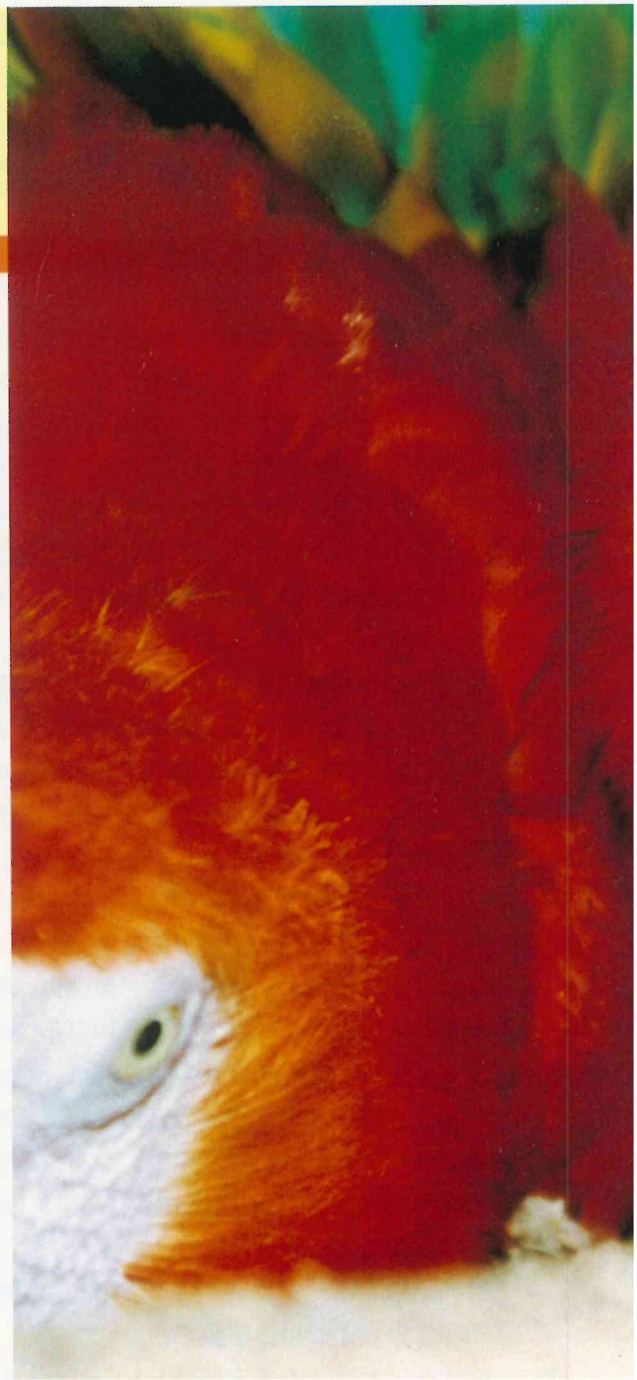
その後も、順調な成長を続け11月11日に、当日雨天にもかかわらず巣箱の外にとうとう出て来てくれました。

元気な親と同じアカコンゴウインコです。(当然ですが。)

今では、親と一緒に2羽のこどもインコが餌入れに顔を突っ込んで無心に食べています。

ただ大変なのは、4羽の結束が固く、展示場に入る者はたとえ飼育担当の私であっても攻撃してくることです。

私の防寒服のそでは、ボロボロです。ハイ。



ふ化22日目の雛(9月7日)

インコの飼育:改善点

■飼料の変更……

従来の種子類50%の内容から、種子類を10%程度に減らし、不足分を果実・人工飼料で補いました。

給餌量はほとんど変化無いのですが、成分的には蛋白質の割合が若干上がり、脂質の割合が減りました。

これからの給餌の結果を検討し、繁殖に成功した要因を明確にしていきたいと思っています。

改善前の飼料

種子とパン類が目立つ

改善後の飼料

人工飼料と果実類で
バランスの取れた内容

イヌの特集Ⅱ

都会で増えるタヌキ

マンション裏の雑木林に現れた子タヌキたち。市街地でも容易に繁殖できるのがタヌキの特徴である。

最近、都会派タヌキの話題が多くなりました。開発などで自然がしだいに失われてゆく現代ですが、身近に野生動物の息吹を感じれるのはうれしいことです。では、なぜキツネではなくタヌキが都会に増えているのでしょうか。

タヌキは雑食性で、特殊なすみ場所を要求せず、なわばり性も強くありません。つまり、なんでも食べ、どこでも誰とでも暮らせるタイプの動物なのです。そのような動物にとって、残飯が豊富にあり、けもの道の代わりとなる側溝が張りめぐらされた都市は別天地なのでしょう。さらに、自然に飢えた都会人は餌付けまでしてくれるのです。

しかし、都市で暮らすことに問題がないわけではありません。たとえば、動物園で保護されるタヌキの数は年々確実に増えています。そのほとんどは交通事故が原因です。犬の病気であるジステンパーや伝染性肝炎、そして疥癬(かいせん)症にかかっているタヌキも増加しています。都会の中に新たな生活場所を見つけたタヌキですが、これからは野山にはなかった都会特有の危険と闘っていかなければならない苦労も背負っています。

交通事故で前足を骨折したタヌキ。このような事故で保護されるタヌキは、毎年その数を増している。

タヌキが都会でくらしてゆくのも楽ではない。新聞にも事故や病気の記事が多く見られるようになった。

動物科学資料館・図書室から

「イヌ」に関する本 紹介

干支の動物にちなみ、図書室の蔵書より、イヌに関する本を紹介します。

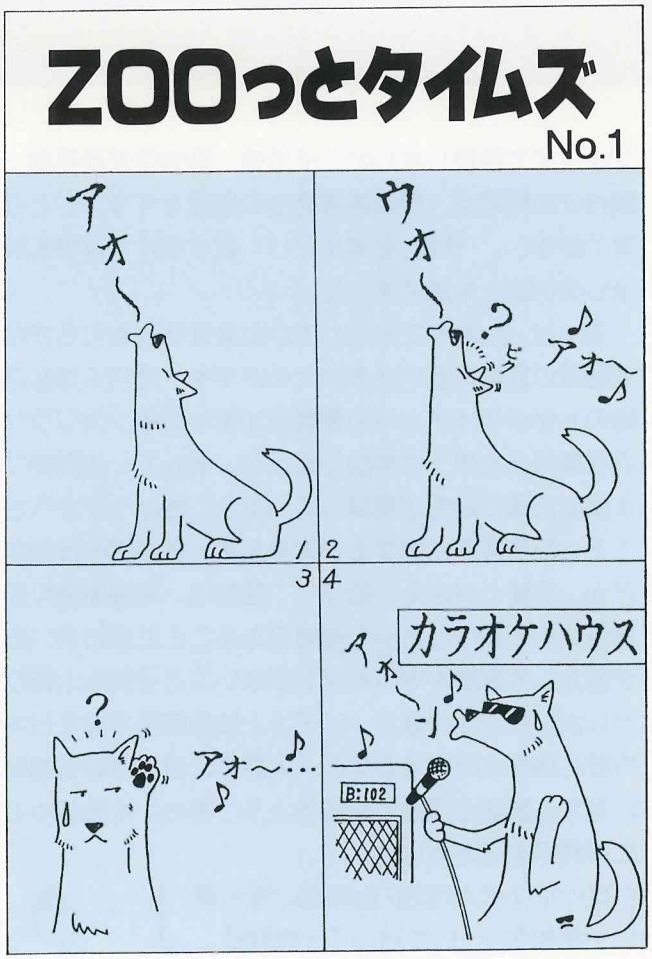
まず、イヌ好きの人のためにぜひお薦めしたいのが不朽の名著、ローレンツの「人イヌに会う」です。人と運命を共にしてきたイヌの行動と心理を、ゆきとどいた温かい眼で描いています。また、デズモンド・モリスの「ドッグ・ウォッチング」は気になる素朴な疑問に動物行動学の立場から、優しく答えてくれます。その他、平岩米吉著「犬の行動と心理」、沼田陽一著「イヌはなぜ人間になつくのか」などもおもしろいです。また、若い女性や子育て中のお母さんにお薦めは、臨床心理学者、森永良子が描いた心温まる記録「人の子、犬の子」です。犬の母のあり方から人の母のあり方を考えてみましょう。

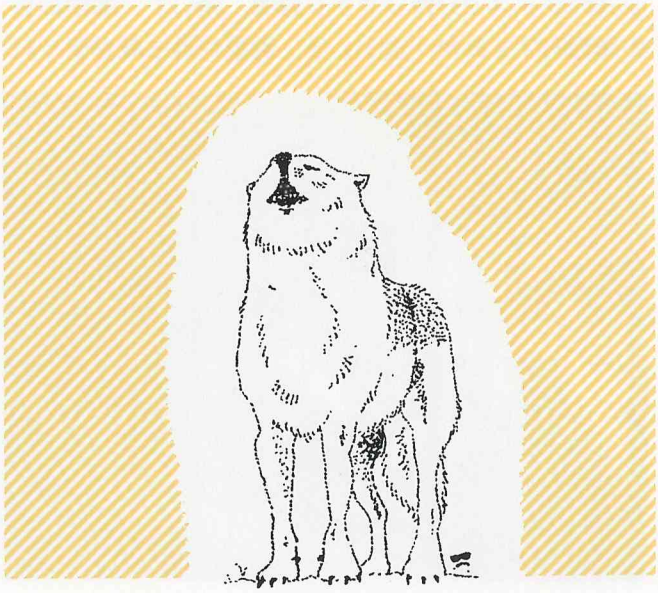
その他、イヌの仲間であるキツネ、タヌキ、オオカミなどの専門的な本、図鑑、児童書など各種50冊以上揃えています。また、この図書室には、動物や自然に関する本がたくさんあります。ぜひ一度お越しください。

オオカミ、イヌのおもしろ話

“オオカミ”と聞くと皆さんは何を想像するでしょうか。私はやはり北の雪降る森林でどこからともなく聞こえてくる遠吠えを思い浮かべます。遠吠えをはじめとする鳴き声は、主にテリトリー(なわばり)を主張するために使われ、時にはこの声は10km四方にも届くとも言われています。かれらは数頭から数十頭からなるパックと呼ばれる群れ(ヒトではファミリー)をつくり、このテリトリーを示す鳴き声でお互いの群れの位置を確認し合います。王子動物園では近くを走る救急車のサイレンを仲間の鳴き声と勘違い？して遠吠えをすることがあります。

ところでオオカミが怒ったり、相手を威嚇したりするために、飼いイヌのように大声を上げて鳴くことはほとんどないと言われています。最近都会でペットを飼う人が急増し、イヌの鳴き声による騒音が問題となっています。狭い都会で家族を持てないかれらの悲しみを感じます。





特別展をふりかえって

―動物科学資料館―

ウォッチング！パートⅡ

―日本の野生動物は今―

1993、11、6～1994、2、28

人と動物との共生をめざすうえでの様々な問題点を日本の野生動物の現状から紹介し、私たちが今、何をするべきかを考える特別展を開催しました。

始めに、日本の動物がいつどこから来たのかを解説。次に6種類の動物の足あと、糞、食べ物を、押しボタン式のクイズで分かりやすく説明。続いて、動物たちの理想的なすみか「里山」を、剥製や落ち葉を使ったジオラマで再現しました。その他、動物の交通事故・餌付けの問題点・農業被害発生の過程をイラストと写真で説明し、「害獣」を捕えたり、殺すだけでは何も解決しないことを訴えました。

後半は、昔、国内で生息していた身近な動物たちがなぜ絶滅の危機に追い込まれたのか？を、特別天然記念物のトキやライチョウの剥製に加え、ニホンカワウソの写真などを使って解説しました。そして、世界中で年間4万種の動物が絶滅している今、私たちがすべきこと、自然保護に関する法律や条約・動物園の役割などを、写真とパネルで紹介し、最後に、絶滅街道の最終ランナーが「人」という動物であることに気付き、皆が協力して自然を守らねばならないことを訴え、結びとしました。このほか、ビデオ上映や切手で見る日本の野生動物を展示するなど、入園者に日本の野生動物に対する認識を深めてもらうように努め、好評のうちに最終日を迎えました。

［3月19日から特別展「動物園の舞台裏」～飼育係の一日を追って～を開催。］

キンシコウの赤ちゃんの名前は“愛愛”

私の名前は、愛愛、前号(No.34)では、まだ名前がなかったのです。昨年の７月に名前を公募し、皆さんから沢山の名前を送っていただいた結果、“愛愛”に決定しました。素敵な可愛い名前をありがとう、“謝謝”。

飼育係の皆さんや、獣医さんたちに見守られてすくすく育ち、私、愛愛も10ヶ月。いたずら盛りになりました。毎日元気に、止まり木から止まり木へ、母の頭から止まり木へ、母のしっぽでブランコと、怖さを忘れ飛び回り、飼育係のおじさんたちを、ヒヤヒヤ、ドキドキさせている毎日です。

嬉しいことが一つ、長い間隣の寝室で別居生活していました父と、12月から一緒に暮らせるようになりました。私も母も、元に戻るまで少し時間はかかりましたが、今では両親と楽しく毎日を過ごしています。

体の大きな父の頭にのったり、手足にぶら下がったり、私のいたずらを黙って許してくれます。少し残念なのは、私のおやつを横取りすることです。近ごろでは、飼育係のおじさんのポケットの中にあるおやつ(ピーナツ)を、すばやく見つけ、手から直接食べるようにしています。父母に食べられるのはしゃくだからね！

仲の良いわたしたち家族に逢いにきて下さい。ジャンプするよ、「エイ」…、すべっちゃった…

待っています。愛愛

生後１日

生後５日

生後100日

神戸市の友好都市・天津市、中国野生動物保護協会及び北京瀕危動物馴養繁殖中心の協力により、“金絲猴”にうれしいニュースが２つ！

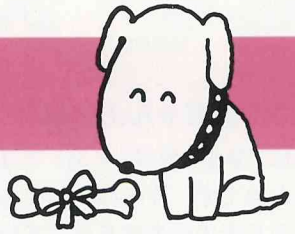
『さらにメス１頭が来園します』

今年３月新しくメス１頭が仲間入りし、４頭のにぎやかな金絲猴ファミリーになります。

『21世紀まで神戸にいます』

2002年５月まで(来園してから通算して10年間)、神戸にいることになりました。これからもよろしくね。

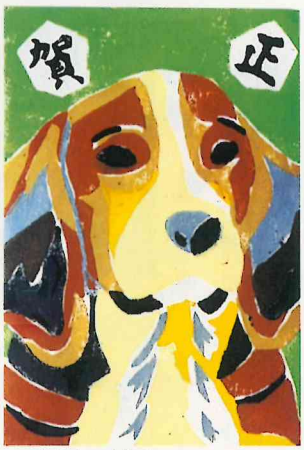
第26回「いぬ年」賀状版画コンクール



神戸市長賞

前田　雄児（有野中）

王子動物園長賞



山田　慎也（県立御影高）

神戸市動物愛護協会長賞

森本　裕子（横尾小）

神戸新聞社賞

足立賀男二（自営業）

神戸市教育委員会賞

野口　修平（松尾小）

神戸王子動物園協会賞

北本　翔（多聞台幼稚園）

サンテレビジョン賞

森田　潤一（奈佐幼稚園）

応募総数1,619点の中から、特別賞7点（上写真）、金賞30点、銀賞100点が選ばれました。今年も開催予定ですので、ぜひご応募ください。なお、詳しい応募方法は『広報こうべ』11月1日号に掲載予定です。

編集後記

新装なった『はばたき』35号をお届けします。1974年3月に創刊号が産声をあげて以来20年、やっと成人したところです。

創刊20周年を記念して、市長から祝言をいただきました。

最近は子供たちを中心に活字離れが進み、いまや写真雑誌の時代といわれています。

そこで『はばたき』もサイズをA－4版に大きくするのを機会に全ページをカラー化しました。

写真、文章等すべて手作りで、忙しい仕事の合い間をぬって編集したものですから、一般誌のように上手とはいえませんが、心温まる内容と動物たちは、やはりカラー写真が似合うということでお許しをいただきたいと思います。

これから皆様のご意見等を参考に、さらに良いものにしようと張り切っています。（編集委員）

創刊号、第9号（初めて表紙をカラー写真に）、34号（前号）

『サマースクール』に参加しよう!!

夏休み中に行われる人気イベント『サマースクール』。毎年違った様々なテーマで動物について学習してもらっています。第23回を迎えた今回は「動物のエサ」について詳しく学びました。実習を多く取り入れ、みなさんに飼育係の仕事を体験してもらいましたが、なかでも調理実習は好評で、普段は手にしたことのないような大きな包丁で悪戦苦闘しながらも、なんとか無事にカバのエサを作ることができました。最後に自分たちが調理したエサをカバに与え、おいしそうに食べる様子を間近で観察しました。次回も楽しいテーマでみなさまの参加をお待ちしていますので、ぜひ参加してください。なお、詳しい応募方法は『広報こうべ』7月1日号に掲載予定です。

35年振りのオオアリクイ展示

平成5年11月17日に横浜の野毛山動物園からメスの「マツ」と静岡市日本平動物園からオスの「ボニート」というオオアリクイが来園しました。牛乳、ヨーグルト、タマゴやミンチ肉をミックスした餌を細い舌で器用にすくい食べています。改装されたアリクイ舎は床暖房、プール付きの獣舎で彼らはお気に入りです。オオアリクイは中央、南アメリカの密林、草原に住む貧歯目で長い毛に覆われていますが寒さに弱い動物です。しかし、マツもボニートも日本の風土に慣れているのかとても元気です。

インドゾウの『太郎』が急死しました

1994年1月23日午前9時37分、王子動物園の人気者だったインドゾウの『太郎』が急死しました。47才でした。その日の朝早く、飼育担当者が寝室の中で倒れている太郎を発見。みんなで全力をあげて看病しましたが、ついに帰らぬゾウとなってしまいました。

『太郎死ぬなよ！太郎！がんばれ！」の絶叫も通じぬまま……

前日まで食欲もあり、元気にお客様の相手をしていましたので、日本の動物園にいるオスのインドゾウでは最高齢であったとはいえ、誰もこんな急に別れることになろうとは思いもよりませんでした。ほんとうに寂しくなりました。

太郎は1957年王子動物園に来園し、36年もの永い間よく頑張ってくれました。ありがとう太郎！安らかに眠ってね。

後には、姉さん女房の『諏訪子』が残されました。諏訪子は日本の動物園にいるインドゾウで最高年齢の51才。頑張って太郎の分まで長生きしてほしいと飼育係全員が願っています。

ありし日の太郎の勇姿

ホッキョクグマ舎新築工事始まる!!

「平成６年夏完成予定」

王子動物園は、今、動物園再編整備計画を立てて、毎年園内の施設の整備を進めています。

現在、ホッキョクグマ舎と無料休憩所を整備工事中です。

ホッキョクグマ舎は、今までのオリとコンクリートの動物舎とは違い、滝や擬岩を使ってできるだけ自然環境に近い情景づくりを行っています。また、陸上の様子だけでなく、水中の生態もガラス越しに見られるようになっています。

夏には、新居でいきいきと暮らしているホッキョクグマが皆様のご来園を待っていることでしょう。

はばたき　第３５号
平成６年３月１日発行

編集　神戸市立王子動物園　☎(078)861-5624
発行　(財)神戸王子動物園協会　☎(078)801-5711
神戸市灘区王子町３丁目１
印刷　アイテム　ジャパン

定価　２００円